

＜第9回世界選手権 福岡大会 飛込報告書＞ 飛込ヘッドコーチ 安永三郎

飛び込み競技は、7月22日から29日まで福岡県立プール（アクシオン福岡）で行われた。参加国はアルメニア、オーストラリア、オーストリア、アゼルバイジャン、ベラルーシ、ブラジル、カナダ、中国、コロンビア、キューバ、フランス、チェコ、スペイン、フィンランド、イギリス、GRE、ドイツ、ハンガリー、イタリア、日本、マレーシア、カザフスタン、メキシコ、オランダ、ロシア、スイス、スウェーデン、タジキスタン、台湾、ウクライナ、アメリカ、ベネズエラ、以上32カ国の出場があった。それぞれのエントリー数は女子10mシンクロに13カ国、男子3mシンクロに14カ国、男子3m飛び板に38人、女子1m飛び板に30人、女子高に31人、女子3mシンクロに14カ国、男子10mシンクロに12カ国、女子3m飛び板に34人、男子1m飛び板に32人、男子高に29人というエントリー数であった。

22日

＜男子3mシンクロ予選＞14位 日本（宮本基一郎、宮本幸太郎）240.54

出だしは42.00と45.50とまずまずの出だしであった。自由選択の1本目205bで48.60という失敗演技をして14チーム中14位に終わる。決勝進出の8位は271.59で自由を最低でも60点取らなければいけない。

種目的には自由の難易率合計が9.0以上ないと相手にならない。最低でも9.2ないと駄目である。最高は10.0でロシアチームの107b、407c、5353bであった。決勝では1位中国（自由選択難易率合計9.9）、2位メキシコ、3位ロシア、4位イギリス、5位ドイツ、6位オーストラリア、7位アメリカ、8位スペインという順番であった。

＜女子10mシンクロ決勝＞3位 日本（宮寄多紀理、大槻恵美）297.00銅メダル

日本飛び込み界悲願のメダル獲得である。予選3位で通過した日本は決勝でも調子よく、途中4位に落ちたがそこからの粘りは見事なものがあつた。最後の種目に75.60（この得点は中国の77.40に次ぐ得点である）をとり、オーストラリアを振り切って297.00点という高得点で3位になった。4位に落ちた時こそ冷静でしかも集中力も切れていない。こういう選手が今まで日本にいたのかと思う。

23日

＜女子1m飛び板予選＞14位 笠井里栄子 226.17

笠井選手は3種目目まで無難にこなしていた、11位という順位であつたが4種目目303bで完璧な飛び出しをした。入水に持っていく際、水の確認を急いで身体の締めが緩んでオーバーになってしまった。その結果17位まで順位を落とした。出場選手最年長の笠井選手は、最後の403bで平均7.0を出して準決勝進出を狙ったが惜しくも14位にとどまってしまった。この試合でUSAのKunkel RachelieとHUNのBarta Noraの二人が305cをエントリーしてきた。USAの選手は高いハードルからの演技で305cを見事に決めて61.20点をとっている。準決勝では失敗し

ていたが女子でも305cの時代が来た。女子1mにも難易率3.0の時代が来た。

<女子1m準決勝A>

6人ずつに分かれて3位までが決勝進出を果たす。ドイツの2人、カナダの2人そしてロシア、アメリカの選手。カナダのHartley Blytheは403bで高さのある演技で平均8.1を出した。

<女子1m準決勝B>

このグループで残るのは大変である。中国2人とLashko Irina、Ilyna Vere、Lindberg Annaがいる。Lashkoの2本目105bは64.74という女子1mの全種目を通じてのハイポイントを獲得しての決勝進出を決めた。

<女子1m決勝>

Lashkoが1日3試合というきつさがたたったのか403b入水がぶれていた。結局6位に落ちた。優勝はHartley Blytheで203bだけ55.89あとはすべて60点から61点台をマークして300.81で優勝した。やはり高さのある演技という点では見応えのある試合であった。

<男子3m飛び板予選> 2位 寺内 健 443.40

19位 宮本幸太郎 357.84

寺内健選手は3種目終了時点で6位、4種目で3位、5種目から2位という順位でとくに5種目107bはよく板に粘って高さのある飛びだしをして81.84というハイポイントを取り443.40をとった。

この試合は19:00よりはじまり22:15くらいまでかかるという長丁場であった。宮本幸選手は最初の107bで50.22であったが3種目終了時点で23位、4種目では25位、5種目で20位、6種目で19位と追いついていったが6点差で敗れ去った。

24日

<男子3m飛び板準決勝・決勝> 3位 寺内 健 712.38 銅メダル獲得

寺内選手の103bは非常に高さがありノースプラッシュで決まった。2ラウンド後、ほぼ4人のデッドヒートとなった。1位のSAOUTINE Dimitry (ロシア)とは201b、301bは同点で他の種目でやや点が低いくらいで結局2位はWANG Tianling (中国)、3位寺内、4位PLATAS Fernando (メキシコ)が入った。制限選択だけをみると寺内選手232.50はドイツのWELS Andreasに0.03の差で4位、5位にはWANG が229.05、2位にはPENG Bo(中国)が入っていた。

決勝205bでやや後ろに逃げて入水はセービングして68.40、これは本人にとっても失敗ダイブであっただろう。2ラウンド後5位、3ラウンド後4位、4ラウンド後3位5ラウンド後4位、6ラウンド後3位。日本に2個目の銅メダルを獲得した瞬間であった。4位のPENGとの差は、僅か0.09であった。

プレッシャーと戦いながら決めるときは決めるという姿は立派なものである。会場の緊張

感に包まれて、最後の演技の時は会場全体が応援しているという感じであった。観客の皆が味方についたと思った。700点が4人というかなりハイレベルな争いとなった。

<女子高予選> 11位 宮寄 多紀理 290.76
19位 樋口 まゆみ 261.00

宮寄選手と金戸コーチとの息の合った試合をみせてもらった。後半の追い上げは見応え十分であった。とくに最後の5251bは素晴らしく72.90であった。「宮寄は練習で良いと試合でも決めてくれる選手だ」と金戸コーチ。海外での試合経験で得たものは非常に大きく、ここぞというときに必ず響いてくる。

樋口選手は前半の107bで31.50という失敗をしてしまった。これが後々響いて、後半良く追いつけたのだが19位に終わった。結局18位とは0.54の差であった。試合が終わって彼女が「すみませんでした」という裏には相当な悔しさがうかがえた。

25日

<女子高準決勝・決勝> 9位 宮寄 多紀理 455.79
決勝 6位 宮寄 多紀理 480.78

準決勝での制限選択だけでは6位につけていた宮寄選手は決勝でも調子よく、2本目205bは66.12、4本目305cでは63.99そして最後の5251bでは68.40という安定した演技をしていた。決勝での自由選択飛び得点315.75これは5位に相当する。結局、決勝6位入賞を果たした。

26日

<女子3mシンクロ予選> 10位 日本(西井亮子、樋口まゆみ) 258.45

1位から3位はさておき、4位UKRは269.61で10点そこそこの差であった。日本は最後の5本目5235dで48.72という失敗ダイブをしてしまった。一番悪い飛び出しをしてしまった。点数だけをみると4位になる確率もないこともない。決勝得点を前回の世界選手権と比較して1位282.30→347.31(中国)、2位276.18→320.61(ロシア)、3位263.91→303.03(ドイツ)などなど飛躍的に点数が伸びている。各チームともレベルが上がっている。中国の205bは最高にあっていた。10点満点を出した審判員が3人もいた。自由選択飛びで80点ダイブを2つという格の違いを見せつけた。

<男子10mシンクロ決勝>

日本の寺内兄弟は健選手の膝の調子が悪く、10mシンクロと高飛び込みの出場を断念し、今後の大会に備える。日本の今後を背負う選手として仕方のない決断であった。優勝は中国361.41、2位メキシコ336.63、3位ウクライナ336.06で300点を超えるチームが7チームあり非常に見応えのある試合となった。

27日

<男子1m飛び板予選・準決勝> 10位 宮本基一郎 333.90
準決勝 9位 宮本基一郎 346.53

板踏みが朝の練習に比べて非常によく助走も安定していたので、大変良かった。後ものでは205cはやや膝が抜けた分、高さがなく入水も間に合わないという失敗があった。405cは完璧に近い演技であった。チームがまとまっての声援が観客席の人たちまで巻き込んでいったという感じがした。本当に大きな拍手の中で演技をしたことは心に残る試合であっただろう。準決勝では予選より13点アップの346.53で順位を1つあげて9位とした。

中国のWANG Tianlingは107b3.3(予選で失敗30.69で準決勝では使っていない)、405b3.4、5337d3.4を飛んでいた。決勝では少し疲れたのか205cで65.70これでも彼にとっては失敗ダイブであろう。結局、彼は433.14で2位。1位はWANG Feng(中国)444.03。3位にはDOBROSKOK Alexander(ロシア)414.21という結果であった。

<女子3m飛び板予選> 31位 笠井里栄子 195.30

笠井選手は1本目105bで46.80、2本目5152bで59.40とまずまずの出だしであった。しかし、205bで19.80点と305bでは助走が少し前に流れて膝が抜けたような状態で49.50。最後の405bでも19.80点という大失敗をしてしまった。試合前の練習で首をとられ、上手く動かせなかったのだと思う。それをむきになって動かそうとしたから力が入って失敗してしまった。この試合で2人の選手が板に手をあてるというハプニングがあった。そのどちらも3群で305cと305bである。やはり3群は助走から後ろにかけてこないと飛べないのであろうか。

28日

<女子3m飛び板準決勝・決勝>

準決勝の制限だけでみると1位LASHKO231.57。2位GUO227.37。3位LINDBERG227.22。4位ILYNA223.80。5位PAKHALINA214.32、という上位の得点であった。決勝では自由選択飛びに強いGUO Jingjingが369.30で得点合計が596.67という圧倒的な強さで優勝。2位にはLASHKO320.82で552.39。3位にはPAKHALINAが329.22で543.54。

<男子高予選> 21位 寺内 佑 321.03

寺内選手はまずまずの出だしで305bを69.60で乗りきった。2本目に207cでショート入水の24.75。3本目以降は64.80、78.72、69.72とこのままいけば予選通過は間違いないと思われた。最後の626cで13.44という点数で大失敗オーバーで結果は21位となる。1位はTIAN Liang(中国)514.62、2位はHU Jia(中国)488.64、3位はHENPEL Jan(ドイツ)449.70という結果であった。

29日

<男子高準決勝・決勝>

優勝はT I A N 6 8 8 . 7 7、2位には2本目に1 0 9 cを飛んで9 0 . 3 0をとったD E S P A T I E A l e x a n d r e (カナダ) 6 7 0 . 9 5、3位には最終種目に5 2 5 3 bで9 1 . 8 0をとったH E L M M a t h e w (オーストラリア) 6 7 0 . 2 3という成績であった。

この大会を通していえることは、これはわかりきってはいるけどなかなかできるものではない。グランプリ大会とか国際大会にどんどん出て行ける。プロのコーチとかそれに準ずるコーチがいて、そこで試合をして強くなる。練習でももちろん強くなるが試合期間中にも強くなる。それだけ多くのものに揉まれる事が必要である。

どんな試合をしてもどこにいても常に冷静であること。寺内選手は最後の種目になってスウエイコーチが興奮していることに気づく、しかし、これで冷静になれたそうである。それから、今回飛び込みだけにトレーナーとして加田洋二先生に来ていただいた。「試合直前に筋肉を触られるより事前合宿の段階から触られるほうが、選手も安心できて良いのではないか。できれば事前合宿から来たかった。」という先生の言葉は嬉しかった。こういう事を一つひとつクリアしていけば飛び込み競技はもっと期待できる。

いま、世界でどの位置にいるのか、どのレベルにあるのか、という事が具体的にはっきりしてきた。各選手・各コーチとも新たな課題を得たようだ。これからますます練習に励んでチャンスがあればどんどん海外に出て行ってほしい。そうすればO l y m p i cのメダルは必ず取れるものと信じている。その手ごたえ十分の大会であった。

最後になりましたが大会関係各位に対しまして衷心よりお礼申し上げ報告とします。